

緒方惟栄と佐伯

羽 柴 弘

(会員・佐伯市龍護寺)

去年の十一月二十二日、大野郡緒方町で、「緒方惟栄公八百年祭」の式典があげられるというので、寒い日ではあったが私は元氣を出して参列した。

式場は皆さんご存知の、風の吹きさらす惟栄公の館跡、巨大な記念碑の下でまず神事が行なわれた。大神系緒方姓の同族の方々が、全国から三十数名参集されていたのは驚きであった。また町内奉賛会の方々も多数出席され、祝賀の席上では町内外の崇敬者有志が、交々立って惟栄公の武勇や偉徳をたたえ、アトラクションでは中学校の女生徒による緒方神楽が上演され、いとも賑やかなものであった。

緒方惟栄(以下公称を省く)は源平争乱の時代、豊後の豪族として鳴らしていた。惟栄はそもそもは平重盛の

ご家人であつたが、大宰府に拠っていた平家勢力を掃滅して大功があつた。ところが程なく源頼朝と義経が不仲となり、惟栄は義経に味方して岡城を築き、義経をここに迎えようとした。

しかし、武運に恵まれなかつた義経は、惟栄らに擁せられて都を後にしたが、海上に出ると程なく台風に遭つて、大物浦で乗船悉く覆没し、義経主従は命からがら吉野山に逃れた。以後は関東の追捕を避けつつ、北陸から奥州への逃避の道行きとなる。惟栄についてははっきりしないが、どうにかして豊後に帰りついたようである。

頼朝は、緒方惟栄の一族が宇佐八幡宮を焼き、神宝を奪つた罪を問うて、文治二年(一一八六)所領豊後を奪つて上州沼田(上野国、今の群馬県沼田市)に流罪とした。しかしその後の取調べで、惟栄が平家勢力を掃滅し

た功を思い朝廷に奏上、建久元年（一一九〇）惟栄の罪を免じて、新たに豊後の内佐伯の庄を与え領地とした。

惟栄は喜んで帰国の途中、山香郷立石付所で馬上に病み、佐伯に帰ることを得ずして死去したと伝えられ、惟栄の墓も同地にある。しかしこれには異説があり、建久七年（一一九六）鎌倉より任命された、豊後国司大友能直の入国を、惟栄が浜脇まで出迎えたとしている。（大友文書録）しかし大友能直は、豊後に赴任していないことが通説であるので、ここでは立石付近で亡くなったとして話を進めたい。

ところで、これからが本論であるが、佐伯には緒方惟栄の名前の出てくる伝承が三つある。

第一は本匠村因尾の、みかまえ三竈江・まえたか前高両明神の祭神、平光世・光国兄弟の物語りで、「大友興廃記」巻十三に、「三竈江明神之由来」として、

「因尾に於て、光世・光国、緒方三郎惟栄が為に誅せらる。——」（後略）

とある。これは緒方惟栄の手の者に討たれたのであり、平氏落人追討の当座、そのようなことあったことは当

然である。佐伯は豊後の国の一隅で、緒方氏の勢力下にあったからである。今ごろ緒方惟栄をとがめる人もあるまいが……。

さて、第二は佐伯市白瀉にある、若宮八幡宮の創建についてであるが、これは同社拜殿入口に掲げられている創祀由来記に、建久年間云々の文字があり、『鶴藩略史』にも、

慶長九年（高政は）相いで塩屋八幡山に城す（建久年中緒方惟栄石清水八幡宮を此に祀る。）（中略）而して八幡祠を白瀉に移し、鎮護神と為し城山八幡宮と為す。

とある。これを若宮八幡社の緒方官司にお尋ねしたところ、社伝では建久五年（一一九四）の勧請ということになっているそうだ。これは上州沼田から帰った建久元年から四年後に当たる。惟栄が生きて佐伯に在ったとすれば、少々間延びしている。私は今、次のように考えて見ているがどうだろうか。

鎌倉幕府から赦免された惟栄らは、しかも領国の一部佐伯庄を与えられ、喜んで帰国の途についたと考えてみる。途中京都石清水八幡宮に参拜、新領地である佐伯庄

の国土の鎮護として、その分霊をうけて豊後に向かい、佐伯帰着を目の前にして立石で死去されたとする。遺臣たちは亡骸を葬り、死体の一部遺髪であろうか、それに八幡宮の分霊を守り佐伯に帰着した。遺志にもとずいて孫に当る佐伯惟康が佐伯初代となり、佐伯庄全域の要の地（後の城山即ち）八幡山に、若宮八幡社として祀った。それが建長年間であつてよい。

以来慶長九年に至る約四百年間、惟栄の創祀として佐伯氏歴代の尊崇、佐伯庄内の庶民の信仰が、連綿としてつづいたことを思わなくてはならない。さらに毛利氏によって白瀉の地に移されはしたもの、鶴屋城鎮護の神として、引きつづいて八幡神の崇敬は今に至るまで変らない。この八幡信仰は八百年の歳月を経ている。

ここで私の言いたいことは、佐伯の封土と庄内全人民の安康を冀ったのは、実に緒方惟栄であり、佐伯氏の遠祖を大神惟基とし、佐伯氏の始祖を佐伯惟康とするならば、佐伯氏の元祖として、その間に緒方惟栄を位置付けてはどうだろう。若宮八幡宮は、佐伯庄を愛する惟栄の悲願であり、その遺志を奉じて今日まで、いや今後いつまでも祭り継がれるべきである。

もう一つ、第三にあげたいものは龍護寺観音である。寺伝によれば建久年間、緒方惟栄の遺臣山本源太が、武を捨てて仏門に入り、有明と名乗って当地に來たり、主君の菩提を弔うために草庵を結んだとされている。それは恐らく惟栄の没後あまり年数が経ってはず、目の前に八幡山の見える番匠河畔に、草庵を定めたことが容易にうなずける。

この山本有明については、惟栄の遺臣という外、その生国・年令・経歴・没年など、一切不明である。寺そのものも戦国争乱のつづいた歴史の中で、廢寺となつたこともあつたようだ。ただ大永年間、梶牟礼城主佐伯惟治によって寺の建築が行なわれたことになっている。そして今は開祖山本有明の名をとって羽明山と号し、臨濟宗妙心寺派に属する禪寺である。

なお、佐伯氏の菩提寺として、遠祖大神惟基・元祖緒方惟栄、それに佐伯惟治以下歴代の位牌を祀っているし、境内には十三代佐伯惟真の苔むした墓があることを付け加えておこう。

緒方町は昨年十一月、維栄公の八百年祭を盛大に催し

た。それは惟栄が緒方に八幡宮三社を創建した時から数えていいる。佐伯では昭和十九年（一九四四）白瀉の若宮八幡宮で、惟栄公の七百五十年祭を営んでいる。逆算すれば建久五年を死歿の年としている。これは故増村隆也氏の指導によった由である。これによっても佐伯での八百年祭はまだ十数年先、前に書いた建久元年立石死去として数えれば、もう十年先ということになる。

史談会としては、佐伯氏の元祖緒方惟栄公の八百年祭を、いづれ盛大に催さねばなるまい。私のような当て推量で考えるのでなくて、確たる史料や、地元佐伯にあるもろもろの資料を検討の上で、惟栄公の死没の年次をきめていただきたい。

それは畏敬する会員佐協貫一氏に頼みたいと思うが、会員の皆さん、いかがなものであろうか。



郷土の出版紹介

弥生町の文化財

編集 弥生町文化財調査委員会

発行 弥生町教育委員会

A5判 四一頁

弥生町文化財調査委員会は弥生町歴史と文化を語る会と一体となり、早くより文化財巡り・講演会等活発な活動が続けて来た。そしてこの度この書を刊行した。史跡磨崖石塔群をはじめとする四つの県指定文化財を持つ弥生町は、また早くから文化財の町指定を行い、今日ではその数二十九の多きに達している。

その中には佐伯地方の開祖とも言うべき佐伯氏の榎牟礼城跡や、文化・文政時代の水路開削の苦心を語る「常磐渠記」また無形文化財「佐伯和紙製造」など、特色のある多種多様な文化財が明瞭な写真、丁寧な解説文で記載されている。さきの『宇目町の文化財』と言いい、こうした書が次々に刊行されることは、文化財愛護の高揚に資するは勿論、まことに嬉しく、楽しいことである。

（塩月）